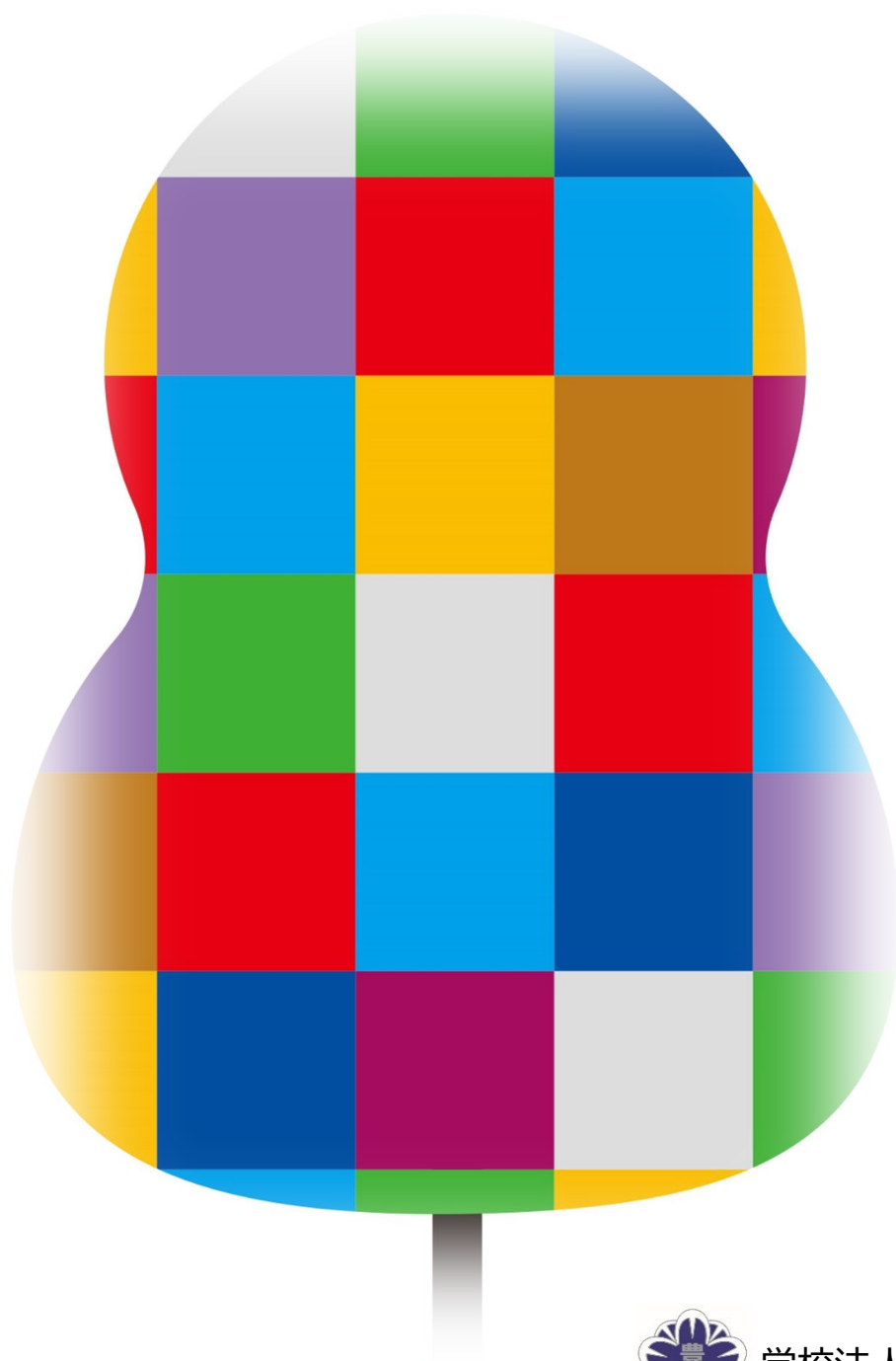


令和 6 年度

高等専修学校における多様な学びを保障する先導的研究事業
「都道府県との連携による高等専修学校機能強化の先導的モデル構築プロジェクト」

～県・地域企業との連携により企業関係者の積極的な学習への関りを通して
多様な学びに対応できる指導プログラムの構築～
実施報告



学校法人豊野学園 豊野高等専修学校

学びのセーフティネットとしての役割を果たしてきた本校にとって、メタバースの存在はとても大きなものになるかもしれないとの直感があった。これまでの成果をベースとした上で、さらに多様な学びの一つとしてメタバースを取り入れることで、生徒たちの学びにどのような変化が見られるのだろうか。現実空間と仮想空間を融合する中で、どのような生徒の活動や変化が見られるのか、わくわく感をもちながら進めている自分の姿に気づいた。対面授業を主体とした現実空間と、メタバース上に展開する仮想空間とを高度に融合させたシステム構築自体については本年度は教師主導による提案が必要となるものの、その運用や企画は年を追うごとに徐々に生徒の手に委ねていくことで、より生徒たちにフィットする学びへと変化していくことを期待している。



『学びのウェルビーイング』とはどうあるべきなのか。今年度は長野県教育委員会学びの改革支援課及び心の支援課の皆様にもご協力いただくことができた。また、県民文化部県民の学び支援課、こども若者局次世代サポート課様からも貴重な意見をいただきながら進めてきている。具体的な助言として、仮想空間を活用した学びの事例を、長野県としても様々な立場で情報共有が必要な段階にきているため、教育委員会としても参考になったとのご意見をいただいた。また、豊野高等専修学校の取り組みが、不登校生への対応のリーディング的な役割を担っているのではないかと、さらに対象を不登校生徒のみならず通常の学校や学級における効果的な活用方法を検証できる状態にきているのではないかと意見もいただいた。まさに『学びのウェルビーイング』に着目していただいたご意見でもあり、さらに豊野高等専修学校の実践事例を他校種でも取り組めるか協力校をつくり、実証していくのはいかがでしょうかとの今後に向けてのありがたいご意見も聞かせていただいた。文部科学省の委託事業のまさに真髄ともいえるべき汎用化による教育効果の波及に言及していただいている。今後この方向で『学びのウェルビーイング』をさらにすすめ、不登校の生徒も含めそれ以外の生徒においても効果的な方向を見いだしていく次年度に繋げたいとの思いを改めて心に誓った。

はじめに

第一章 事業概要

- 1) 事業の実施体制
- 2) 学習ターゲット・目指すべき成果
- 3) 本事業が必要な背景
- 4) 現状の課題と改善のための取り組み
- 5) 開発するモデルの概要

第二章 事業報告

- 1) 企業による実証授業
- 2) 企業認知度調査
- 3) メタバース空間の構築

第三章 事業検証



事業概要

事業の実施体制

学習ターゲット・目指すべき成果

本事業が必要な背景

現状の課題と改善のための取り組み

開発するモデルの概要

県・地域企業との連携により企業関係者の積極的な学習への関わりを通して 多様な学びに対応できる指導プログラムの構築

1) 事業の実施体制

本校は発達障がいや不登校経験者または、何らかの配慮が必要な生徒が全校生徒数の82%と多く在籍しており、「学びのセーフティネット」が大きな役割を担っている。これまで中学からスムーズに移行できる体制づくりや、地域の外部団体・企業と連携した仕組み作りを構築してきた。これまでの実績をもとに、更なる職業教育機能を強化したシステムを構築する必要がある。そのために教育委員会・次世代サポート課や地元企業と連携したシステムを構築し、「学びのセーフティネット」としての機能の充実と強化を発展させ、生徒の経済的自立と社会的自立の実現を目的に新たなプログラムを開発し先導的モデルとなることを目的とする。地域自治体や様々な企業・団体と連携することで、専門分野業界が求めるカリキュラム構成を構築し、多様なキャリアをもつ人材がメンターを務め、さまざまな進路に定着できるようにするための支援体制を整える。その過程で「新しい学びのあり方(メタバース空間の可能性)」の方向性を模索し深める事業とする。

2) 学習ターゲット・目指すべき成果

【学習ターゲット】

発達障がいがある生徒、不登校など支援が必要な生徒
さまざまないきづらさを抱えている生徒

【目指すべき成果】

県及び地域企業と連携し、企業が求める人材育成プログラムを構築し進路を自己決定でき社会に定着できる生徒になる。

メタバースを活用した多様な学び方を構築し、生徒が「自分らしさ」「自分の強み」を持ち、豊かな未来を描ける人材を育成する。

3) 本事業が必要な背景

長野県の小・中学校における不登校児童生徒数は、令和4年では5,735人(1,028人増)、高等学校では949人(162人増)とおり、10年連続で増加している。また、発達障がいを抱える児童生徒の数も多く、二次障害としての不登校も考えられている。また、出口問題もあり、長野県の通信制高校の卒業生の3人に一人は無業者であると報告されている。通信制のみならず、他の高校においても同様の問題を抱えているものと推測される。さらに離職率においても大きな課題を抱えていると言わざるをえない。

本校では、不登校生の在籍率は令和2年度には68%、令和3年度には50%、令和4年度には57%、令和5年度には56%、令和6年度入学生では54%となっている。令和5年度の支援が必要な生徒(発達障がい等)は3年生で見ると、精神手帳・療育手帳を持つ生徒が10.4%、発達障がい診断ありの生徒が48.8%、精神系服薬生徒が28.6%と高い比率になっている。本校における教育の実際を課題も含め、家庭・地域に公表しその意見を求める活動を通して、具体的に取り組まなければならない課題や成果も見えてきている。

本校への入学者のうち不登校経験者は平均すると57%であるが、本校での学びや生活を通じて3年次では近年1割までに改善してきている。この要因としては、中学校からスムーズに通える体制づくり、マナー講座、SST・LST導入、外部講師による講座開設、さらに教育相談チームとしての相談体制の整備、校外学習を増やす試みなどを行い、様々な支援機関や企業との産学連携を模索してきた、その結果が不登校の改善率の向上につながっていると考えられる。

しかし、産学連携だけでなく、産学官の連携によってさらに、充実した取り組みができるものと考えられる。企業との連携は進めているが、さらに積極的に企業との連携を深めるために、本校の教育方針に同意いただける企業との情報交換や実証授業及び意見交換等の機会を多く設定していくことが有効であると予想できる。長野県ではフリースクールの認証制度が始まるが、フリースクールの質の確保が重要と考えている。子どもたちの「自主性」を尊重しながら、質の確保をどう行うかについて、本校は「学校らしさ」と「学校らしくなさ」を兼ね備えており、今後の不登校の子どもたちにとっての一つのモデルとしてのあり方をさらに検討し深めていくことが必要とされている。しかし、長野

県における高等専修学校の認知度は低く、本校において自分らしく生活できつつある現状を多くの生徒の皆様や保護者及び学校や行政関係者に認知していただくために、県の行政と連携した取り組みができることが必要と考えられる。また、卒業後の出口指導の充実と離職率の低減はさらに今後重点的に改善する必要があると認識しており、長野県産業労働部及び企業との連携を密にして、企業の方、本校生徒、他校生も含めて、最近の就職状況や企業が求める人材について意見交換の機会を持ち、就職に係わる情報量を増やすこと、及び事前に多くの企業をよく理解すること、逆に企業の方に本校の生徒の特性を理解していただき、適切なマッチングの状況を設定していくことが必要である。

長野県産業労働部の協力及び企業の人事を総合的に扱っている企業との連携において、多くの企業の方に本校の合同教室でブースを開設いただき、生徒が色々なブースにおいて、企業の特色・仕事内容などを聞く機会を設定したいと構想している。このことにより、企業についての情報量を増やすとともに、マッチングの機会を多くし、就労意欲の喚起や離職率の低下の解決に資するものと思われる。魅力ある企業の企業人に本校の「総合の時間」に講師として参加いただき、企業人としての想いや失敗談及び企業としての特色・魅力等について話をしていただける機会を設定することにより、地元企業の魅力を知り、地元に着用する人材の育成に資するものと考えている。不登校傾向の生徒に対しては、上記内容をメタバース空間を利用して提供し、学校に来られない生徒にとっても十分な情報の提供につなげることができるモデルを開発し、不登校の改善と共に、多くの企業情報を入手することができる状況を設定することにより、改善が図れるものと考えられる。

4) 現状の課題と改善のための取り組み

① 行政との連携

① 課題

行政自体が、高等専修学校について認識不足の点が多い。本校と行政の関わりをもち、広く不登校問題について話し合う場を設定する。

② 改善のための取り組み

次世代サポート課、県民の学び支援課にはたらきかけ、不登校問題について話し合う機会（協議会）を設定する。多様な生徒を受け入れている立場の方に向けて、本校が現在行っている指導内容を提示し協議を行う。

② 企業との連携

① 課題

企業における認知度調査はされていない。

生徒の職業についての意識と理解不足が認められるため、企業に対する知識はあいまいな点が多い。

② 改善のための取り組み

地元企業への本校に関する認知度を把握する。本校への授業参観を通して、本校の認知度 UP につなげる。また、企業による実証授業等を通して地元企業の素晴らしさに気づく機会を持たせ、生徒に仕事観、職業観を持たせる。

③ 生徒

① 課題

本校の生徒、学生の素晴らしい点が多くの方に知られていない。発表の場の設定が不十分。不登校の生徒に対する手立てとして、多様な取り組みを行っているが現状では積極的手段がない

② 改善点

発表の場を、仮想空間（メタバース空間）に設定することで、校内外への発信が可能になる。またメタバースの多様な利用方法を検討し、対応可能なメタバースを用いた不登校改善に向けての手法を検討する。

5) 開発するモデルの概要

①行政との連携

長野県次世代サポート課、長野県県民学びの支援課との連携により、不登校問題に関する情報交換の機会を設定し、不登校傾向の児童生徒に対する対応の方向性を検討する。このことにより、広い視点からの不登校問題の解決の糸口を探り本校教育のさらなる充実に活かす。

②企業との連携

- ①企業と学校関係者が交流を行い、お互いに知り興味を持つことで、今までにないキャリア教育の道筋を描き就労につなげる。本校の施設を利用して、地元で活躍する社会人や経営者の失敗体験談等の講演、職業体験などを実施する。
- ②企業との連携により、本校生徒の実態を把握していただき、生徒と企業のマッチングの可能性を探る。

③メタバースに関するモデルの概要

①メタバースを活用した学びの場の構築

- ・高等専修学校の専門性を生かしたメタバース空間の構築
- ・校内外の利用者がアバターで自由に散策できる学習環境の提供
- ・デジタル作品展示館、地元企業と連携した専門的な学びの導入

②バーチャルコミュニケーションによる学びの促進

- ・集団になじめない生徒や対人関係に不安を持つ生徒への配慮
- ・情報端末を活用した文字による意見共有の可能性
- ・メタバース上でのバーチャル教室の稼働によるストレスフリーな学習環境の実現

③ウェルビーイングな教育環境の創出

- ・多様な学びを相互に認め合う学習文化の醸成
- ・オンラインとリアルを融合した学びの深化
- ・リカレント教育の提供による社会人の学び直しの支援

事業報告

企業による実証授業
企業認知度調査
メタバース空間の構築

1) 企業による実証授業

ねらい：企業人による実証授業で生徒・学生の仕事観、職業観を養う。

教職員以外の学外の大人との交流を通し、コミュニケーション能力を養う。

今年度の実証授業企業

- ・中野土建株式会社
- ・エヌ・エス・ケイ株式会社
- ・共和コーポレーション株式会社
- ・長野市議会議員
- ・株式会社平澤建設
- ・戦略デザインラボ
- ・本久ホールディングス株式会社
- ・八十二銀行
- ・木瓜建設



目指す効果

1. 実社会への理解を深める

企業が実際に直面している課題や取り組みを学ぶことで、社会や経済の仕組みを具体的に理解する

SDGs やDX など現代企業が重視するテーマに触れる

2. キャリア教育の促進

企業の実務や職種について知ることで、生徒が自身の将来像を描くきっかけを得る。企業の担当者と直接交流することで、職業観、仕事観を広げる

3. 実践的な学習体験の提供

実際のデータや事例を活用した授業を通じて、学校で学んだ知識を現実世界で応用する力を養う。

企業が求めるスキル（プレゼン能力、データ分析、マーケティング思考など）を学ぶ機会を提供する

4. 企業と学校の連携強化

学校教育と企業の実務を結びつけることで、教育の質を高める。

生徒の学びを支援する企業の社会的役割を強化し、地元企業との繋がりを深める。





生徒の感想

(印象に残った言葉)

- ・「当たり前ことは当たり前にする」
- ・「成功の裏返しは何をしないこと。世の中、口だけで何もしない人が多いので、動けば必ず次につながる。失敗しても成功すればいい」。
- ・「失敗しても誰かのために行動できる人」になりたいと思いました。失敗を恐れて行動できない人にはなりたくない。
- ・「すべての人にハッピーを」といえる仕事をしたいと感じました。

(職業について)

・建設業界はマイナスなイメージが強く、汚れるし、肉体労働ですごく疲れるし、もらえるお金も少ないし、とブラックなイメージが付きまといっていました。今日のお話を聞いて、少しずつでも改善されてきているんだと感じ、それに尽力されている女性は素晴らしいと思いました。

・昔と今の政治家に対してのイメージは全然違ってビックリしました。

(進路について)

・様々な企業の方のお話を聞いて、自分は建設業で働くのが向いていると感じた。

・入社して不安なときに、いろいろ教えてくれてちゃんと成長させてくれる会社があると知って、自分が就職するときには、そういうところも会社選びの参考にしたいと思いました。

～実証授業の総括～

様々な分野の専門家や企業の方から貴重なお話を伺うことができました。参加した生徒は、それぞれの経験や考え方に大きな影響を受け、将来の進路や働き方について深く考える機会となりました。

多くの生徒が将来の進路や働き方について深く考えるきっかけを得ることができました。講師の方の言葉や実際の経験談を通して、仕事への向き合い方や失敗を恐れず行動することの大切さを学びました。また企業の取り組みや働く環境の実態を知ることによって、今後のキャリアの参考になったと考える生徒も多くいました。今回得た学びを生かし、それぞれが自分の未来を切り開いていくヒントになっていくことを期待します。

2) 企業認知度調査

アンケートの目的：地元企業の豊野高等専修学校に対する認知度調査

実施期間：令和6年9月～令和6年12月

対象者：無作為に選定した地元企業61社

実施方法：アンケートの趣旨目的を明確にしたお願い文書とアンケート用紙を郵送

調査結果（32社／61社）

質問内容	はい	いいえ
問1 専修学校という学校種は知っているか	92%	8%
問2 専修学校には、「高等課程」と「専門課程」があることは知っているか	42%	58%
問3 豊野高等専修学校を知っているか	46%	54%
問4 豊野高等専修学校の高等課程にある各コースを知っているか	25%	75%
問5 豊野高等専修学校の専門課程にある各コースを知っているか	25%	75%

高等課程にある各コースとは、生活服飾コース、生活情報コース、生活美術コース、生活介護コース

専門課程にある各コースとは、服飾デザインコース、情報デザインコース

課題と対策

	課題	対策
①	「専修学校」という学校種を知っている企業の割合は高いが、その中身を理解している企業はおよそ半数にとどまる。企業の採用や人材育成の観点から、専修学校がどのような教育を行い、どんな人材を輩出しているかが十分に伝わっていない可能性がある。	専修学校の教育内容や特色を企業向けに説明する機会を増やす 「専修学校出身者の強み」や「高等課程・専門課程の違い」を企業向けにわかりやすくまとめたパンフレットや動画を作成
②	企業の半数以上が「豊野高等専修学校」を知らない	企業と学校の交流イベントを実施し、企業担当者に直接学校の取り組みを知ってもらう
③	企業側が「どのようなコースがあり、どんなスキルを持った学生がいるのか」を知らないため、採用やインターンシップ受け入れの検討が進まない。	企業向けに「コース紹介＋卒業生の進路」などを具体的に伝える資料を作成し、関心を持ってもらう。 企業側の求めるスキルと学校のカリキュラムをすり合わせる機会を設け、実践的な連携を強化する。

3) メタバース空間の構築

3つの成果物展示会場と待ち合わせの場（相談会場）

とよせんアートの森 -総合入口-

https://door.ntt/grNfAS2?hub_invite_id=G3dMBu4

とよせんアートの森 -「立体感のある平面構成と絵」デザイン展示室-

https://door.ntt/3ywxLNj?hub_invite_id=FbRFqpj

とよせんアートの森 -「金屏風」デザイン展示室-

https://door.ntt/mf4KbAq?hub_invite_id=dg22YwL

とよせんアートの森 -「竹灯籠・LINE スタンプ」デザイン展示室-

https://door.ntt/FjJ8Aff/?hub_invite_id=giZUKzn

専用メタバース空間での待ち合わせ場所（メタバース相談会場）

https://door.ntt/vBZBYG2/?hub_invite_id=exaUFuf

メタバース空間（仮想現実）では誰もが、アバター、匿名で気軽に参加することができます。

いばら祭（学校祭）展示の様子



本校の学校祭では、メタバース空間での展示によって、来場者に新しい体験を提供することができました。VRゴーグルを使用した没入型体験だけでなく、ノートパソコンでも楽しめる工夫をしました。多くの方に学校を知っていただく学校祭になりました。

技術とアート、伝統文化の融合が評価され、来年度もさらなる進化を目指していきます。また、多くの作品を展示し、自分の作品を他者に見てもらい、評価され、認められるという経験をする中で、自身をつけることができました。



生活美術コース実証授業

メタバース空間の体験とアバター作成
長野市立櫻ヶ岡中学校 袖山賢治先生



授業内容

私たちの作品を展示するギャラリーを作ろう

- ・メタバースって何だろう
事前に作成されたメタバース空間を体験



- ・アバターを作ろう
自分でアバターのデザインをし、メタバース空間へ入室してみます



～生徒の声

メタバース空間に入室して動画や展示を体験することが初めてで、メタバース間の広さに驚きました。
アバターは自分の分身として作ることができることを袖山先生からお聞きし自分でも積極的に作っていきたいと思いました。



事業検証

事業評価委員会まとめ

今後の展望

事業評価委員会まとめ

出席者	【事業評価委員】（敬称略） 統括長 山岸建文 長野県教育員会学びの改革支援課 義務教育指導係長 一色保典 県民文化部県民の学び支援課 私学・高等学校振興幹 樋口雄一 県民文化部こども若者局 次世代サポート課次世代支援係長 玉井慎市郎 長野市立櫻ヶ岡中学校 袖山賢治 長野県スクールカウンセラー 両川晃子 株式会社戦略デザインラボ 岡本洋平 豊野高等専修学校 学校長奥田孝志、副校長市川裕子、講師山岸慎一郎 【発表者】 事業担当（大井知紀、鳥羽義広） 【司会進行】 事業コーディネーター 鳥羽義広 【事務局】 山岸親子 佐藤星子			
委員会日程	回	日程	形式	内容
	1	11月12日	ハイブリット	事業概要の説明
	2	12月24日	ハイブリット	各事業の中間・進捗報告
	3	1月30日	ハイブリット	各事業 今年度の総括
事業ごとの成果と課題				
	成果			課題
企業連携	企業による実証授業の実施 ・生徒の職業観の広がり ・学びへの高い意欲が見られる			・企業との関りを、「話を聞く」だけで終わらず、具体的なコラボレーションを増やす必要がある。 ・企業と共同した職業体験や実践型授業の拡大、
メタバース	メタバースの活用による学びの拡大 ・美術コースの作品展示 ・匿名の相談会場への参加促進			・他コースにも展示や発信の機会を増やす ・グランドルールの作成 ・心理的なハードルを下げ、コミュニケーションの場を提供する
不登校支援	・不登校傾向を持つ生徒のデメリットは、学習面、学力面は在学中だけの話であり、最も深刻なことは、学校におけるコミュニケーションの機会を失うこと。そのことで、社会に出て必要とされる力である協調性や多様な価値観が育てられないことが、一番のデメリットであると考えます。日常の授業の中でメタバースを活用することで、多様な学びを実現していくことができるのではないかと。また、登校に不安がある生徒だけでなく、すべての生徒がともに学べる場（メタバース空間）を提供していきたいと考えます。			

今後展望

令和6年度

- ・メタバース空間の構築（成果物の展示）
- ・行政との連携（事業評価委員会への参加）
- ・企業との連携（実証授業 認知度アンケート）

令和7年度

- ・メタバース空間の拡張（不登校生に限らないメタバース空間の活用）
- ・行政との連携強化（不登校生徒対応における意見交換）
- ・企業との連携（実証授業、生徒の職業体験、生徒会と企業の連携）

令和8年

- ・メタバース空間の完成（仮想空間と現実空間の融合）

この事業で目指すもの

メタバース
（仮想空間）

企業との連携
メタバース空間への参
加

行政との連携
不登校支援

令和6年度 文部科学省

高等専修学校における多様な学びを保障する先導的研究事業

事業内容「都道府県との連携による高等専修学校機能強化の先導的モデル構築プロジェクト」

事業名「県・地域企業との連携による企業関係者の積極的な学習への関りを通して
多様な学びに対応できる指導プログラム構築」

実績報告書

令和 7 年 2 月

連絡先 389-1105 長野県長野市豊野町豊野 1344
学校法人豊野学園 豊野高等専修学校

TEL:026-257-2127 FAX:026-257-3970

●本書の内容を無断で転記、転載することは禁じます